



▲コンフラン=サント・ノリーヌの街



▲川沿いの風景



▲プリュレ城(現在は内陸水運博物館として使われている建物)



▲焼き菓子専門店
「Conflans Saint honorine」
(武蔵中原)

フランス共和国 コンフラン=サント・ノリーヌ市



中島 幸二さん
 なかじま こうじ
 大手洋菓子企業で30年、製品開発に従事。仏コンフラン=サント・ノリーヌ市で修行後、2023年武蔵中原に洋菓子店を開業。ジャパンケーキショーで金賞受賞。キリクリームチーズコンクール2位

私がフランスで過ごしたコンフラン=サント・ノリーヌ(注)は、セーヌ川とオーワーズ川が合流する場所にある、穏やかで歴史のある街です。

私はこの街の菓子店で働きながら、日々の暮らしを送っていました。朝、仕事へ向かう途中に目にするセーヌ川の景色、週末に川沿いを歩きながら立ち寄ったマルシェ、そして、仕事の後に店で同僚や常連さんと過ごした何気ない時間一。そうした日常の積み重ねが、今でも私の中に深く残っています。

休日になると、セーヌ川沿いには

人々が自然と集まり、新鮮な野菜やチーズ、焼きたてのパンやお菓子の店が並びます。川の流れを眺めながら散歩をし、そのまま川沿いのレストランでゆっくり食事をを楽しむ。そんな穏やかな時間こそが、この街らしさだと感じていました。

街の高台には古城プリュレ城(Château du Prieuré)の旧跡が残っており、そこから見下ろすセーヌ川の景色は、今でも忘れられません。長い歴史の中で、人々の暮らしが静かに受け継がれてきたことを、実感させてくれる場所です。

言葉が完璧でなくても、「C'était délicieux!(おいしかったよ)」「Je reviendrai.(また来るね)」そんな一言が、自然と心の距離を縮めてくれました。コンフラン=サント・ノリーヌは、お菓子や食事、そして街そのものが、人と

I N F O R M A T I O N

フランス共和国

人口 約6,860万人
 面積 549,134km²
 首都 パリ
 言語 フランス語

人をつないでくれる存在だったように思います。

今、川崎で営んでいる私の店「コンフラン・サント・ノリーヌ」では、この街で菓子職人として過ごした時間や、セーヌ川沿いで感じた穏やかな空気をお菓子を通して少しでも表現できればと考えています。

(注) 地名は、ラテン語で合流を意味するConflansと、876年にここで見つかった聖遺物の聖人「Sainte-Honorine(聖オノリーヌ)」から名付けられた。

外国につながる子どもと保護者のためのプレスクール

(外国につながる子どものための小学校入学説明会)

まず、保護者に、日本の学校制度や学校生活の流れについて説明し、入学後の生活を具体的にイメージできるようにしました。教育委員会と共催したことで、学校の実情に即した内容を提供できたことは大きな成果だと思います。また、日本語に不安のある保護者には同時通訳を配し、安心して参加できる環境を整えました。その結果、内容の理解が深まり、積極的に質問や意見交換を行う様子が見られました。

子どもたちには、学校生活で使う日本語や集団生活における基本的なルールを体験的な活動を通して教えました。子どもたちは楽しみながら意欲的に参加していました。

さらに、来場した親子に「図書・資料室」を案内し、日本語学習や子育てに役立つ資料を紹介しました。今後の家庭での学びや継続的な利用につながることを期待されます。



会場の様子

今年から、午前・午後の2部制で実施したので、参加者は自分の都合に応じた参加が可能となりました。今後も外国につながる子どもと保護者の双方にとって、有意義な学びの機会を提供していきたいと思っています。

(文:川崎市国際交流協会 蔣 香梅)

多文化共生の取り組みにフォーカス!

「外国につながる子どもの寺子屋」ボランティア養成講座

外国につながる子どもが安心できる地域の居場所づくりを目指して、毎週土曜日に「外国につながる子どもの寺子屋」を開いています。日本語がわからないために、学校の授業についていけない子どもに、日本語や教科学習についてサポートする場です。

この寺子屋のボランティアを育てる講座を1月31日から全4回で開催しました。1回目は田嶋麻理子講師(川崎市教育委員会)による「川崎市の外国につながる子どもの現状と課題・学校の取り組み」、2回目は樋口万喜子講師(NPO日本語・教科学習支援ネット代表)による「日本語と教科学習支援の具体的な方法(日本語力ゼロのこどもたちとどう向き合うか、生活言語と学習言語の違いなど)」、3回目は中村ノーマン講師(多文化活動連絡協議会代表)による「外国につながる子どもを取り巻く環境と川崎市国際交流センターの寺子屋について」、4回目は実際に交流センターの寺子屋を見学するというプログラムです。



田嶋麻理子講師

家庭では母国語で生活している子どもたちに、根気よく寄り添うことで、日本で自立していくことにつながればと思っています。

(文・写真 川崎市国際交流協会 加藤 恵美)